

---

## 品濃 白旗神社

東戸塚駅東口、紳士服のコナカの東側に「品濃白旗公園」という小さな森がある。

その森の高台にあるのが品濃の鎮守様「品濃 白旗神社」である。頭に品濃をつけているのは平戸にも同名神社があるため便宜的に品濃という冠をつけて区別している。

「平戸 白旗神社」については、かつて説明をしたが同社の祭神は源頼朝であり、ここ品濃の白旗神社の主祭神は、源義経である。

まずは神社縁起から。

{御祭神} みなもとのよしのつねのみこと あまてらすおのみこ みよみ とよらひのみこと 源義経命、天照皇大御神、豊受姫命

{由緒} 康元元年（1256年）創建、天正3年、天保11年に夫々改築された。

ご承知のとおり白旗とは、源平争乱の際、敵味方を区別するための旗の色、平家の赤旗に対する源氏の白旗、源氏そのものを象徴する名である。

源氏の武将等が祀られる「白旗、(幡・旗)の名のつく神社は、全国神社本庁傘下八十余社のうち「義経公」を祀る神社は八社である。

しかしながら、何故この地に祀られたか、近隣の「鎌倉 白旗神社」は1200年創建（頼朝公・実朝公を祀る）「藤沢 白旗神社」は、1246年創建（義経公を祀る）当「品濃 白旗神社」は、1256年創建（義経公を

品濃の不思議シリーズ-1



白旗神社と近隣寺社との位置や関係の不思議？

- 左の図は、品濃白旗神社の拝殿の位置と平戸白旗神社の拝殿の位置とを直線で結んで延長しますと北天院(旧跡)にぶつかります。
- 植松寺(じきしょうじ)跡は、現在環状2号線下に在る標識石碑の位置です。この寺が両神社を結ぶ線上の旧街道に面していたことが分かります。
- 品濃と平戸のこれら各寺社がおおよそこの線に沿って並んでいたのが分かります。
- この地域が国境の幹道沿いとしての特殊な立地にあることから現在の旧東海道と相武国境を参考に画き入れてみました。

以上のことや他の調べから、次のような疑問が出てきます。

1. 何故、この近辺に同じ源氏を奉る白旗神社が集まって2社もあるのでしょうか？しかも、一社は源義経を奉り、もう一社は、成立する年代は後になってからですが、源頼朝をまるで一対として補足するようにして奉ったのは何故でしょうか？
2. 何故、古道が両社の間を通っているのでしょうか？しかも、相模の入口に当たるこの地域にまるで門のように乾巽の方角左右から古道を護るようにして配置されているのは何故でしょうか？
3. 北天院の末寺で品濃白旗社の南側に別当寺としてかつて西光院があり、同じくかつては末寺であった東福寺がその別当寺として平戸白旗社の頼朝を奉るのに関わったのは何故でしょうか？しかも上図のように、その北天院を先頭にしてそれらが一線上に並んでいるのは何故でしょうか？
4. 植松寺(じきしょうじ)が、両白旗社とは創建の時代が違いますが、南北朝期にこの街道を西に面し、東に谷戸を背にする要害な場所に時の実力者の指示で建てられたのは何故でしょうか？しかも、その本尊として源氏とも縁のある北条政子が所持した念持仏を奉ることになったのは何故でしょうか？

白旗神社と北天院の謎

祀る「平戸 白旗神社」は、1302年創建(頼朝公を祀る)という流れはあるものの詳細は不明である。

天正19年以来は、当地の知行となった新見氏(その子孫 豊前守正興は安政条約批准の遣米正使となったが正興の建てた祖先の墓が当神社の下にあった)が、明治初頭まで当神社の興隆に尽力した。大正12年関東

大震災の際には、社殿は倒壊したが氏子に損害がなかったので、時の部落長金子鉄五郎は「宮柱うちくだけでも倒れても氏子の怪我なきぞ尊き」と献詠し村人たちは「鎮守様が身代わりになってくださった」と感激して翌年再建に着工、9月28日に竣工した。

その後、太平洋戦争の戦火もくぐり抜け八十余年品濃町の住民を守り続けてきた。

品濃 白旗神社については、どうしても書き残しておきたいことがある。

平成19年12月13日、暮れも押し詰まった夜、大正13年に建立したご社殿は紅蓮の炎をふき上げながら全焼した。

原因不明の不審火であった。

ご社殿を失った氏子は、ただ茫然とする中、日が経つにつれ地元の有力者の一部から再建の声が湧いてきた。

平成20年のまだ肌寒い晩春のある日、地元の有力者2人（S氏とN氏）が私の事務所に突然現れた。話を聞くと御宮の再建に力を貸して欲しいということ。それは現役員がすべきことだろうと一旦は辞退した。



焼失後しばらく祭祀を行ったテント仮宮(品濃 白旗神社)

ところが二度三度と足げく来られ人集め金集めは我々がするから是非共お願いできないかということでもとうとう口説かれてしまった。

そんなことで善戦空しく有志の一人としてまつりあげられてしまったのである。

再建するには、その母体になる組織づくりから始めなければ先へ進めない。

確かに人はある程度集まっていた。ところが組織づくりができるリーダー的な人がなく結局私が事務局長的立場とならざるを得なくなってしまった。

早速、有力者の2人（S氏とN氏）それに神主を交え組織の原案づくりから手をつけた。

組織案として大雑把な枠組みを以下のような形にすることにした。

顧問・相談役・委員長・副委員長・実務を進める部会として総務部会・建築部会・財務庶務部・渉外部会・式典直会部会の5部会。それに会計監査、お手伝いをして頂く参事とした。

建築部会は、どんな社殿を幾らくらいの予算で建てるかを検討。渉外部会は予算に見合う寄付集めを担当することにした。

枠組みはできた。次は具体的な人の割り付けであるが、これが最初の一番大変な仕事であった。

まず顔となるべき委員長であるが有力者2人（S氏とN氏）の内どちらかをお願いしたいと話したところ、いずれも辞退。そこで町内の顔役的存在の2～3人に候補を絞り交渉を始めた。難航したが結果的に、むかし、村の名名家であったH氏が「私は名前だけで、あなた（笠原）が全部取り仕切ってくれるならいいですよ」という釘を刺され、その言葉を飲み込むことにした。

こうして頭は決まった。次は副委員長。これは前述のS氏、N氏、それにT氏、私の4人でスムーズに決まった。その次は各部会の長であるがこれも難航した。私案をもとにN氏が口説いてくれた。私は、事務局の役割を持つ総務部会長の任についた。

こうして平成21年2月、第一回の全体会議を開き正式に「品濃 白旗神社ご社殿再建委員会」が発足した。

4月には、大雑把な予算を立て建築部会と寄付金を集める渉外部会に始動を促し具体的な仕事が動き出した。

8月には第2回の全体会議を召集し、その経過を全員に知らせめ各部



会も始動するよう要請し、その終着時期を平成24年9月の例祭日とすることに決定した。

以後、数回に亘る各部会と計13回の全体会議を経て平成24年9月19日例祭を明日に控え「遷座祭」が斉行されたのであった。

翌月10月20日には、各界から多数の来賓を招き、氏子共々盛大な「ご社殿御造営竣工奉告祭及び奉祝式典」を挙行し、ここに足かけ4年をかけて悲願を成就したのである。

こう書くと、いとも簡単にできたかのような印象であるが足掛け4年、集めた寄付金8,000万円余、集めた神具類十数点、携わった人数延べ数百人という、「ご社殿再建委員会」の手前味噌ながら大事業であった。

この事業に携わったミスターKにしても人をして、まず経験することができないような貴重希少な経験をすることが幾つかあった。

祭祀としては、仮殿遷宮・地鎮祭・手斧始め祭・上棟祭・遷座祭修礼・遷座祭などが順次斉行された。

主な祭祀儀式について概要を記す。

○平成23年3月27日…地鎮祭斉行。元々の社殿地の神様に、ここに新社



完成なった品濃 白旗神社 新ご社殿



ミスターK揮毫によるご社殿正面の扁額



ミスターK揮毫による鳥居に掲げた扁額

殿を建てますことをお許し下さいと祈願。

- 平成23年10月11日…手斧始め祭斉行。社殿工事を請け負ったS建築の手で古来より伝わる儀式を厳かに行なった。
- 平成24年1月29日…上棟祭斉行。これも、S建築の手で設営された建築現場で神職数名が古式に乗り取り恭しく行い神社役員ほか多数の氏子が参加した。
- 平成24年9月19日…遷座祭斉行。これは一旦仮殿にお移り頂いたご祭神を新ご社殿に新しいお住まいができましたのでお移り申し上げますという儀式。日が暮れてから宮司はじめ多数の神職と神社役員及び氏子有志が参列し厳粛に執り行われた。そして翌20日、再建なったご社殿で賑々しく例祭が執り行われた。

これの大型版が伊勢神宮の遷座祭であるが規模や神事数は伊勢神宮に遠く及ばないが儀式の方法は基本的には同じようなものである。

上記のうち地鎮祭の経験はあったが地鎮祭以下の各祭祀儀式は私ミスターKにとって初めて体験したものである。恐らく生涯二度とない貴重な体験であろう。

宮司にとっても初めての体験だったそうで大変緊張したそうである。

世の中には星の数ほどの神職や神社役員及び氏子がいるが生涯で、このような体験をできる人は0.0000001%程度の稀なことであろう。

もう一つ、ミスターKが体験できた希少なことは、鳥居とご社殿に掲げた扁額の揮毫をさせて頂いたことである。

「品濃 白旗神社」と揮毫した扁額である。パソコンで済ませば綺麗で整ったものができるにもかかわらず、宮司から下手とは言われなかったが、「総代会会長の笠原さんの自筆に価値があるので是非お願いします」ということで恥を忍んで揮毫することになったのである。

こんな揮毫をする機会に恵まれる人は、世の中広しといえど、まずはいないラッキーなことである。

ミスターKの寿命は、あと数年？かもしれないがこの扁額は永遠に掲げられる稀有な遺産になると思うと感慨一入である。